

<今回>283回目 2020年10月9日(金)15時~18時 601号室

読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p210、11行目「宋書」は より

<前回>282回目(20-9-25) 出席者 10名

資料(20-09-11-1)前回のまとめ(清水)

-2) 石上神宮 禁足地発掘刀剣(高山)

A 報告 25日午前10時から「多元の会」の藤田隆一氏の呼びかけで、Skypeソフトでビデオ相互会議2回目が出来た。パソコン内の資料を使い読書会での七支刀の新事実について紹介しようと事前に3枚の「まとめ」を送っていたが、当日になると上手く出来なく、口頭での報告となった。281回目、282回目のまとめ資料と千熊長彦の表を事前に送り、当日は菅仲夫家所蔵の最初の解説文を送ろうとしたがうまくいかなかった。

石橋慶二氏が2月14日以来コロナ禍で休会、2回目の参加となった。

前回同様、前回のまとめから、はじめた。七支刀については異形の六叉鉾の伝承と実在、日本書紀の七支刀記事から、発見事情、百済交渉史の観点から高山氏の紹介は興味深い。本日は3回目の資料紹介である。

B 資料 石上神宮「禁足地の発掘刀剣」(高山氏) 拝殿は平安時代の京都から移築された。周辺の石のギザギザ塀は上からのぞけるくらいの高さ、背後に小川が流れて神剣の奉置の様々な伝承がある。正確な記録は唯一明治7年、菅政友が中央の小円丘を掘った時の記録で、素環頭太刀内反(85cm)その他は勾玉、菅玉等の祭祀品で出土品は少量。布都御魂(正中にありとする)。図のように3つの円丘があるも、本殿(正殿)を建てたいという次の官司らの発掘は記録がなく、類似品から推定するのみ。長さが異なるので、それで区別をする。95cm、122cm、79cm、他に太刀1鉄剣1計6振り、神社側は5振り。95cmは岡山の石上神社から来たもので3振の精密な模造品を作り、明治天皇、石上神社、岡山の神社に分祀された、十握剣(八岐大蛇を切った)という。79cmのものは八握剣(宇麻志遅の神宝の内)、122cmは直刀太刀で背に金象嵌の跡があると指摘するも誰も調べない。記紀の創作神話で刀剣類はこの地の祭祀を司った和邇氏系の市河の臣(物部首)の振魂の刀剣か。

C 読書 p200 四 「分国論」と倭の5王 から

1)海北の国 倭武王の上表文に「渡りて海北を平らぐこと95国」この文の原点は近畿、京・奈良ではなく九州北部海岸である。(緯度から見た日本列島と半島の位置参照)

2)紀によれば①神功52年5月千熊長彦ら百済から至る。海の西の諸諸の韓を既に汝が国に賜う②略(誤字p202, 11行目王恩を垂れた(乗は誤字)③百済記の表記を近畿の視点で書き直されている。④3女神、宇佐嶋に居さしむ、海の北の道の中に在す。名ずけて道主貴と白う。此れ水沼君等の祭る神これなり。九州北部の地を基点とす呼び名として地理上の極めて適切であろう。

3)記には仲哀が筑紫の訶志比宮に坐して熊襲と戦争をしようとしているとき、神功に西に国あり、金銀財宝の国だから侵略せよと言わしめた。仲哀は自分の目で確かめたら西の方は波ばかりと応えて信じなかったから天罰を受けた。新羅は訶志比から見れば真北なのに、西と表現しているのは近畿の読者を想定しているからだ。

4)分国論と倭の5王 金錫享は倭王に認可された半島權益の新羅について、日本国内としていて、海北は関門海峡と論じている。古代天皇名もイワレ、ミマキ、サザキなど朝鮮系に属するという。(後は続きあるも省略)

次回日程 2020-10-26(月) 15時から18時 602会議室

-11-9(月) 15時から18時 602会議室